

カトリック

広島教区報

No. 114

カトリック
広島司教区

発行責任者
広報担当
服部大介神父

「点訳版」あります。
お問い合わせください。

広島市中区鞆町 4-42
広島司教区内
TEL (082) 221-6017

教会が「多くの人の家」となりますように

広島教区長 アレキシオ 白浜 満 司教

「世界宣教の日」を前に

皆さん、カトリック教会において、十月は「宣教の月」とも呼ばれ、毎年、十月の最後から二番目の主日が「世界宣教の日」と定められています。今年は、十月二十一日（日）が「世界宣教の日」に当たっています。またこの日は、全世界の教会が、教皇庁宣教援助事業のため、祈り、献金、犠牲をもって協力する日とされています。どうか皆さん、それぞれの立場や方法で、福音宣教のために、ご協



白浜満司教（津和野教会公式訪問）

力をお願いします。

さて、広島教区において、今年度は、教会の「福音を伝える使命」を思い起し、この使命によりよく生きるためにチャレンジする一年に位置づけられています。とくにわたしたちは、教皇フランシスコの使徒的勧告『福音の喜び』を指針として励んでいます。が、前回の教区報では、教皇がその結び（二八七番）において、「教会が多くの人の家となり、すべての民の母となつて、新しい世界を誕生させることができますように」と述べていることに注目していました。教会が「多くの人の家」となるとは、教会がすべてのの人にとつて、「家庭（家族）」のような存在になるということではないでしょうか。

「世界家庭大会」という集い

この夏、日本カトリック司教協議会からの派遣により、わたしは一行五名で、三年毎

に開催されている「世界家庭大会」（第九回）に参加する機会に恵まれました。今回は、アイルランドの首都ダブリンで開かれ、教皇フランシスコが『福音の喜び』（二〇一三年十一月）に続いて公布された使徒的勧告『愛のよろこび』（二〇一六年三月）の理解を深め、分かち合うことを主な目的とした大会でした。八月二十一日（火）、ロイヤル・ダブリン・ソサイエティを会場に、午後七時からの荘厳な晩の祈りをもつて開始されました。二十二日（水）〜二十四日（金）の三日間は、第一日目「家庭と信仰」（『愛のよろこび』第一〜第三章）、第二日目「家庭と愛」（『愛のよろこび』第四〜第六章）、第三日目「家庭と希望」（『愛のよろこび』第七〜第九章）というテーマで、午前十時から午後一時まで、講話、パネルディスカッション、ワークシヨップ、証言など十五種類の行事が三〜四ヶ国語の同時通訳をもつて行われ、各自、

司教メッセージ・じゃけえのう・教区の動き
一〜二面
教区の動き・典礼の窓⑤
三面
災害サポーターセンター・平和行事
四面
世界平和記念聖堂関連・J-CARM
五面
地区・海峡からの風・一粒会・青少年・ひと粒
六〜八面

じゃけえのう

「じゃけえのう」とは広島弁で「だからね」という意味。

今年、明治維新百五十周年に当たります。明治維新と言えはすく思い出されるのは日曜日の大河ドラマ「西郷どん」（西郷隆盛）でしょう。また初代総理大臣伊藤博文、明治維新の元勳、自由民権運動の主導者板垣退助など明治新政府の樹立に大きな役割を果たした人々を思い起こします。この明治維新に関連する自治体行事は、二千九百件を超えるそうです。特に鹿児島（薩摩藩）、山口（長州藩）、高知（土佐藩）、佐賀（佐賀藩）の四県の記念行事が目立ちます。指導的立場にあつた四県出身者の働きを考えれば当然の祝賀行事となるでしょう。しかし福島県会津地方には祝賀ムードはないとのこと。幕府に忠誠を尽くして新政府軍と闘つた会津藩は賊軍として攻撃されました。日本の新時代を切り開いた輝かしい歴史の裏面に戊辰戦争の悲劇や白虎隊の集団自刃の出来事を忘れることはできません。

幕末から明治維新新政府の下で起こった浦上四番崩れの悲しい出来事も忘れることはできません。約三千四百名の潜伏キリシタンが西日本二十二か所に強制配流されたことは信仰の自由、命の大切さを考えさせられる重大な出来事となりました。広島教区内でも岡山（鶴島）、鳥取（積谷）、広島（福山、広島）、島根（松江、津和野）、山口（秋）の各地に流配され、改心を迫られました。津和野では厳しい迫害下、三十七名のキリシタンが信仰を証し、命を捧げました。教区としてはこの三十七名のキリシタンの列福運動に取り組み、先ごろ教皇庁に列福調査開始の請願を出しました。

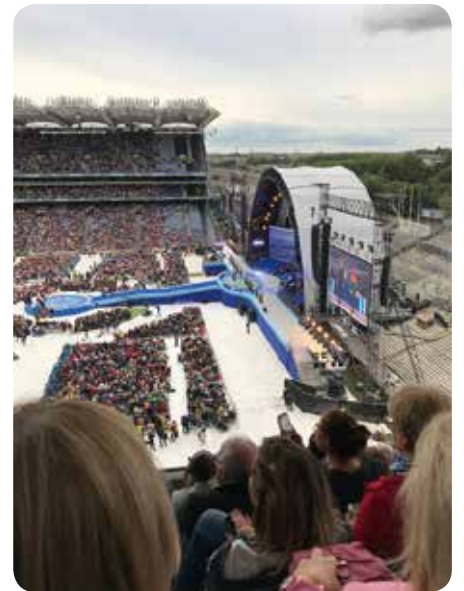
日常生活の様々な場面で遭遇する課題があるけえ、それら出来事の表裏、功罪を見極める目、より広い視野と理解が必要なんよ。

（津和野教会 山根敏身）



世界家庭大会、開会の祈りの様子

興味のあるものを選んで参加する形式でした。昼食後、午後二時半からは全員がメイン会場に集い、基調講演とそれに関連する複数の家族の証言を聞き、四時半から共同司式のミサがささげられました。その後、さらに午後七時から八時まで七種類の行事が並行して組まれていました。四日目の二十五日土曜日は中休みでしたが、午後六時半から、「フェスティバル・オブ・ファミリーズ」という、音楽、ダンス、歌、スピーチなどを交えた祭典が約二時間かけて行われ、約七万人規模のクローク・パーク・スタジアムがほぼ満席に近い状態でした。この祭典の途中で、教皇フランシスコが登場し、スピーチを行ない、証言を行なった家族を直接ねぎらわれました。最後の二十六日の主日には、フェニックス・パークで、午後三時から教皇フランシスコ司式による閉幕



フェスティバルの様子

ミサが行われ、大会参加者のみならず、アイランド全土、近隣諸国からも、約六十万人を超える信者が集まりました。ミサの前後に小雨が降ったものの、ミサ中には雨が止んだ状態で、大きな支障や混乱もなく、延べ六日間の大会を無事終了することができました。

社会の反応

この世界家庭大会中の地元新聞に、同性カップルを認める法律が成立しているアイランドでは、「社会の三分の一の人々は、もはやカトリック教会の狭い家庭の概念に当てはまらない」という内容の報道もなされました。さらに、今回のアイランド訪問中に、教皇フランシスコは、カトリック教会の聖職者による性的な虐待を受けた被害者の方々と面会して謝罪し、また、閉幕ミサの回心の祈りの中でも繰り返し、聖職者による性的な虐待による罪、これらの虐待を隠蔽し、ふさわしく対処しなかった教

会の罪を告白して、神と人々にゆるしを願いました。そして、正義に基づく教会の対処と、聖職者の規律の向上による内的刷新を祈り求めました。

「家庭的である」とは

「男は父母を離れて女と結ばれ、二人は一体となる」(創世記二章二十四節)という聖書の言葉に基づいて、男女の生涯に及ぶ愛と忠実の契りを「結婚」と呼び、そこから生じるよるこびに満たされた家庭を理想とするカトリック教会は、試練に立たされています。しかし、伝統的な結婚の教えを神のみ旨と理解するカトリック教会の中に、結婚生活と同時に独身生活を尊重するという、召命の多様性があることを忘れないようにしたいと思います。今後、カトリック教会は、この

召命の多様性の中に、同性愛の自覚がある人々を差別・排除せず、どのような態度をもって彼らに同伴していけばよいのか、神のみ旨にかなう「家庭的なあり方」を識別して行かなければならない岐路に立たされています。この課題にチャレンジするに当たって、わたしたちは、三位一体の神のあり方にこそ、まことの「喜び」・「幸せ」の源であるという原点に立ち返って判断するように努めたいと思います。三つの違った位格(ペルソナ)が、①互いを尊敬し、②進んで自己を与え、③ともに協力して歩む生き方は、家庭、学校、会社、地域社会、国家、国際社会など、人間のあらゆる共同体が「家庭的である」ための特徴であり、この開かれた交わりから、教会の福音宣教のエネルギー(愛)も派出してくるのではないのでしょうか。

現代社会の逆風の中で、カトリック教会の中にある過ちや罪について、謙虚に神のゆるしと恵みを祈り求めながら、自己刷新の歩みが続ける「教会が多くの人の家となり、すべての民の母となつて、新しい世界を誕生させることができますように」。

教区の動き

平和の使徒推進本部

【二〇一八年「教区の日」岡山教会で開催】

九月十七日(祝・月)岡山教会で行なわれた。三地区持ち回りで開催され、昨年度から名称も「教区の日」と変わって行なわれている。

十二時から開催された川村信三神父の講演会が開催され「信徒発見から五十年、私達の信仰を考える」のテーマで話された。そして地区初めての取り組みとして、フィリピンとベトナムの共同体のために、講話の解説等をバルト神父が英語で、ロイ神父がベトナム語でそれぞれ別々の場所で行なった。

引き続きミサも、「国際ミサ」として、日本語・英語・タガログ語・ベトナム語等を交えて行なわれた。ミサ後、「聖書書き写しリレー」開始式が行なわれ、始まりの幟町教会、荻神父にたすきが渡された。今後一年かけ教区内を巡回する。

最後に該当者十名の内七名の司祭・修道者が参加された「ダイヤモンド・金銀祝/祝賀会」では、ダイヤのカンガス神父が「感謝、感謝…」と



「教区の日」ミサ後の集合写真（岡山教会）

話され、キーキ入刀を司教と二人で行なった。
今回、会場を提供した岡山教会信徒に限らず、岡山鳥取地区内全ての教会の信徒が、準備から片付けまで協力し運営された。
【平和の使徒推進本部からのお知らせ】

「教区の日」の国際ミサの中で、野中神父（平和の使徒推進本部長）から、「これより、広島教区創立百周年に向けて、『聖書に親しむこと』『教区の一一致のしるし』を目的に、『聖書の書き写しリレー』のスタートを宣言します。」の宣言に続き、白浜司教から第一のリレー教会である幟町教会、荻神父に「たすき（巨大聖書バインダー）」が手渡されリレーがスタート

平和の使徒となろう



平和の使徒推進本部

命」を土台にしながら、今年二年目「福音を伝える使命」について思いを巡らす一年を過ごして頂きたい。
その基礎を再認識するため、今秋「聖書の書き写しリレー」また今春からスタートしている「聖書通読・写経キャンペーン」を企画し実施している。既に聖書通読において二名が完了した。完了者には認定書と記念品を渡す予定。多くの方に参

した。来年の教区の日までの期間、四十三ヶ所の教会を巡る。二〇二三年の創立百周年に向けて、昨年から三年間のテーマ「教会へのチャレンジ」を掲げ、昨年の一年目「すべての人の平和を祈る使命」を土台にしながら、今年二年目「福音を伝える使命」について思いを巡らす一年を過ごして頂きたい。

聖書通読・写経キャンペーン 完了者紹介

通読を完了された方

第0001号 葛島 愛子様（倉敷教会）

第0002号 柚木 正文様（倉敷教会）

今春から開催中の通読・写経キャンペーンに皆さんもご参加ください。

加して頂きたい。完了後は平和の使徒推進本部まで。
書き写しリレーについては、「たすき」がリレーされる前に、予め書き写しに使用する原稿用紙と説明資料が配布される。説明資料をよく理解し、準備ができれば、その教会が受け持つ聖書の箇所を原稿用紙に書き写す。その後、「たすき」が巡ってきた時、書き写した用紙をはさみ込み、日曜日の主日のミサなどで、祈りや奉納などを自由に行い、次の教会へリレーする。
また、このリレーと共に、より多くの方の参加を願う「多言語（日本語含む）」による聖書の書き写しを行う。詳細については、各教会に多言語で説明資料を配布する予定。各教会で一緒に盛り上げて頂きたい。

↓「たすき」 巨大聖書バインダー



白浜司教から荻神父へ「たすき」が渡された



シリーズ「典礼の窓」では、白浜司教による典礼の解説を掲載します。

仲介の役割（二重性）

前回、①典礼の主宰者は、復活されたイエス・キリストであり、聖霊を通して人々の救いのために働かれ、②キリストはご自分の教会を通して、その救いの働き（祭司職）を継続しておられること、③また、キリストを頭（大祭司）とする教会が典礼によって継続する祭司職に

は、二つの方向性があることを考えていきました。
それは、教会が、聖霊の交わりの中で、頭（大祭司）であるキリストを通して、御父に礼拝をささげる上昇的な側面、また、キリストが聖霊とともに、人間に恵みを注ぐ（人間を聖化する）下降的な側面です。どのような典礼にも、これらの二重性が並行して見られます。これらの働きは、典礼で用いられることばやしるしに注意するとよく分かります。感謝の祭儀（ミサ）や聖務日課（教会の祈り）では、とくに「神への礼拝の働き」が行われ、秘跡と呼ばれるものは、おもに「人間の聖化の働き」が行われます。この二重の働きを仲介する者こそ、典礼の主宰者であるイエス・キリストです。このような仲介の働きをされるキリストについて、パウロは、次のように説明しています。「神はすべての人が救われて真理を知るようになることを望んでおられます。神は唯一であり、神と人との間の仲介者も、人であるキリスト・イエスただおひとりなのです。この方はすべての人の贖いとして御自身をささげられました」（一テモ一・四七）。

広島司教区
災害サポートセンター
西日本豪雨の被害
状況と対応

七月の西日本豪雨は、広範囲にわたり大きな被害を与えた。教区災害サポートセンターは、第一回会議を七月九日(月)に行い、その後、定例会を通じて対応にあたっている。主な活動は、ボランティアの宿泊所の開設、社会福祉協議会への協力とボランティアへの参加、被災された方への協力など。今回の教区報では、岡山、倉敷、三原を取り上げ、次回に呉、小豆浦などを紹介する予定である。教区内外から総額約二千八百万円(九月末現在)に上っている。

岡山市東区平島地区

岡山市東区平島地区は、大雨の影響で砂川の堤防が破堤し、大きな被害があった。八月一日より岡山教会にボランティアのための宿泊所「岡山南」を開設し、活動場所を東区平島(宿泊所より車で約三十分)に限定して災害復旧にあたった。当初、岡山市と倉敷市を一つの地区として活動を始めようと試みたが、広範囲であること、また倉敷協働体の信者さんが既にチームで効果的に動かれている様子

などを鑑みて岡山地区のみで活動することとなった。活動期間は、八月から九月(九月は土日のみ)の間、延べ宿泊利用者数は、二十一人。作業内容は、屋内外の泥の掻き出し、廃棄場の片づけ、庭や公園のガラス拾い、家屋、家財の洗浄、東区ボランティアセンター閉所に伴い宿泊所「岡山南」は終了した。今後は支援を必要とする団体への協力など可能性を探る予定。

倉敷市真備地区

倉敷市真備町の大雨の被害は甚大で、信徒の家だけでも、床上浸水など大きな被害を受けた家が十六戸、地形図を見ればオボン形をしており、小田川と三本の支流と高梁川に囲まれ町は川土手を守る状態。この長雨でも、決壊を想定している人はいなかった。また、避難のタイミングも深夜だった。現在は、転居、再築、動揺の日々。高齢者は今後の住居をおどうするか、学校に通う家族は通学に苦難している。これから冬を迎えるが、どのように備えるかなど心配が後を絶たない。皆さまの祈りと支援をお願いしたい。また、教区の募金とは別に倉敷協働体でも真備地区のための募金をお願いしている。



倉敷市真備町の様子

三原教会

三原市では土砂崩れで住宅が押しつぶされたほか本郷町で沼田川とその支流が氾濫し約七百ヘクタールが浸水し、八人が死亡、また竹原市でも同様の被害で四人の死亡が確認された。信徒の死亡はなかったが、床上、床下浸水、家屋損壊といった大小被害に見舞われた方は七名、そしてほとんどの人が断水十四日から一カ月間という状況だった。三原教会は井戸を所有しており、シャワー施設、洗濯機、トイレを井戸水から取水していたため、すぐに信者や保育園保護者をはじめ、地域の方々に使っていた。三原教会内にボランティアのための宿泊所を開設したが、利用者は少なかった。地域での断水が長く続いたため、教会の井戸水を使って給水、洗濯は朝九時〜夜十時ごろまで、ひっきりなしに人が訪れ、シャワーを使うために、夕方は順番待ちの列ができた。教会と隣接したところに住んでいる、イエスのカリタス修道女会のシスターの方の全面的なバックアップによって乗り切ることができた。

平和行事 2018

八月五・六日、世界平和記念聖堂、エリザベト音楽大学などを会場に、平和行事が行われた。テーマは、「What CAN do for PEACE: 平和のためにできること」。二〇一七年ノーベル平和賞受賞のICAN国際運営委員の川崎哲さんの基調講演、被爆証言、青年プログラム、平和行進、平和祈願ミサ(東京教区岡田武夫名誉大司教 司式)などが行われた。ミサには、前田万葉板機卿、駐日バチカン大使、ジョセフ・チェノットウ大司教を含む司教団と司祭団で盛大に執り行われた。

***青年プログラム「Peace Cafe第二弾〜多様性のなかの一致 Unity in Diversity〜」**

きっかけは、中井淳神父様との韓国への和解のための旅でした。そこで私たちは様々な境界線を越えて互いに受け入れあう事を知りました。平和を実現していくために、教会も今、人々の多様性に寄り添っていかねばならない局面を迎えています。平和発信の柱である平和行事でこのことを分かち合いたいと思ひ、フランシスコ教皇の言われた『多様性のなかの一致』をテーマに分科会を企画しまし

た。

手作りのお菓子と四か国語の資料、通訳者を準備し、グループで分かち合いを行いました。日本、韓国、ベトナム、アメリカ、インドネシアと計八十八名の方が来られ、青年以外の世代の参加も大変嬉しかったです。

多様な人が集い、平和のために多様性のなかで一致するにはどうすればよいかと語り合ったあの場合には、本当に平和の思いが漂っていたと思います。会場に入りきらず二十名程お断りしたので、次はもっと準備をして、平和行事全体をより活発で深いものにしていきたいです。

(広島地区青年会 長安まみ)



青年プログラムの参加者

重要文化財世界平和記念聖堂
保存修理事業の進捗状況

司教座聖堂「世界平和記念聖堂」の保存修理事業は、聖堂の内壁補修が終わり、身廊に設置した仮設足場がクリスマスまでに、一旦取り払われる。外壁から浸透した雨水のシミ跡や、内壁に発生した亀裂の多くを補修した。壁全体を一齐に塗装すれば、均一に見栄え良く仕上がるが、耐震調査委員会の専門家の助言で、対策の必要な箇所を一つ一つ補修、塗装した。このため多少の色ムラが壁面に残るが、聖堂の歴史を刻む風合いも大事な保存要素であることを教わった。

耐震補強工事は、正面玄関の脇にある小玄関に鉄骨フレーム



耐震補強工事を行った鐘楼内部
新たに取り付けられた鉄骨フレーム

を付ける工事を残すだけとなった。楕円平面の小玄関はレンガを積んでカーブした壁になっている。このレンガの壁を人が運べる大きさに分割して解体、搬出し、鉄骨の柱を取り付ける。その後、搬出した壁を元あった場所に復元する。カーブした壁が完成すれば、壁の裏にレンガが積まれていることなど気づかなくなる。見えないところも忠実に保存するという文化財の保存修理の原則に従った手間の掛かる工事である。

この他、鐘塔の耐震補強工事も手間の掛かるものであった。鐘塔の耐震補強は、文化財として高く評価されている塔の外観を損なわないよう、窓などの開口部の内側から鉄骨フレームを取り付けた。塔内に搬入できる鉄骨部材の大きさに制約があり、小さく分割した部材を塔内に持ち込み、組立て、取付けた。平和の鐘のある七階では、大きな鐘を吊り下げたまま、細心の注意を払いながら、鉄骨を組立て、取付けた。一番大きな鐘（直径一・四メートル）は「平和の元后」、次いで「日本の使徒 聖フランシスコ・ザビエル」（一・二メートル）、「ドイツの使徒 聖ペトロ・カニジオ」（一メートル）、「初の殉教者 聖パウロ三木」（〇・九メートル）で、全重量は二・五トンにもなる。これらの聖人が見守る中、首尾よく耐震補強が行われた。ちなみに「平和の元后」は記念聖堂の守護聖人である被昇天の聖母マリア、「ザビエル」は日本にキリスト教を伝えた人、「カニジオ」はルターの宗教改革で混乱の中にあつたドイツで教会博士として聖人に上げられた人、「聖パウロ三木」は日本での初めての殉教者二十六聖人の一人です。後ろの三人は、イエズス会に所属し、聖人に列せられた聖職者です。これらはイエズス会のドイツ西管区の仲介でドイツの鉄鋼会社から贈られた。記念聖堂の献堂に寄せたイエズス会の宣教への熱い思いが鐘の音から伝わって来ます。

世界平和記念聖堂募金
郵便振替口座

口座名義：カトリック広島司教区

口座番号：01320-3-109791

*通信欄に「聖堂保存献金」と記入してください。

J-CaRM 広島便り
生活習慣の違いの克服

八月二十六日、トゥアン神父様が防府に來られベトナムの信者さんたちの為にミサをささげられました。約四十人のベトナムの若い信者が集まり、ミサがささげられました。初めて聞くベトナム語のミサでした、実習生が実りある活動が出来るよう祈りました。

生活習慣の違いから来る誤解が人生を壊してしまうことを幾つか経験しましたが、次の様な事態に直面しました。銀行口座は夫婦両方の名前で開設するのが当たり前の国があります。さもないと口座から引き下ろすのに、名義人を連れて行かなければなりません。実際にあつたことですが、毎月の給与を共同名義の口座に振り込み、定年退職金も振り込み、これから余生を楽しもうとして、ドイツ人に奥さんに残高を尋ねたら、残高は数百ユーロであつたそうです。

奥さんは毎月の入金をせつせと自分名義の口座に移していたのですが、彼はその口座には全くタッチできなかったのです。彼はアツプセットして家を飛び出し、一人暮らしを始め、がんになり退職後数年で人生の幕を閉じました。一方日本の様に印鑑やカードで預金の引き落としができる国では、口

座の名前が夫婦喧嘩の原因になることはありません。家の名義も日本では所帯主の名義で登記されているのが普通で、家は実質夫婦の慣習の国からきた人には日本人の様に理解しません。二人で築いてきたのに家の名義は主人の名義になっていることを知った外国人妻は、自分がのけ者にされた、捨てられたと思ひ、日常生活が壊れ、二人の関係が悪化、ついに離婚となつてしまいました。私の英国の経験です。本社と直営工場のコミュニケーションを良くしようと思ひ、ソフトボール大会を企画しました。ルールを良く説明し、みんなが理解したと思つたのですが、いざ試合が始まつたらバスターはホームと一塁の間を走るのみです。彼らの頭の中はクリケットルールでやっているのです。

生活習慣の違いを克服する事は容易ではありません。言葉が片言で通じたくらいでは、頭・心の中は同じにはなりません。

このように国の習慣、考え方が違う場合、夫婦間でしっかり話し合い、理解しあわないと、誤解が恐ろしい結末になってしまうことがあります。悲劇を避けるために、外国から来ている人に理解してもらいたい事はたくさんありますね。

(防府教会 藤本忠文)

地区便り

広島地区

*「聖体授与の臨時の奉仕者」養成講座

今年度の養成講座が幟町教会で六月から始まり、第一回の加藤信也神父、第二回の井淳神父に続き、第三回が九月九日(日)、大西勇史神父を講師に行われ、約五十人が聴講した。

「キリストのお供をするもの」をテーマに、私たちは神さまから意味のある存在として命が与えられ、使命を持って生まれたということ、自分がキリストと共に歩みたいと思った出会い、さらにイエズス会・牛尾幸生神父の遺稿となった『キリストの聖体』(家庭の友)の「小さな、誰にでも近づくことができる、頂くことが出来るパンとしてキリストはいつも私たちと共にいてくださる…」などの言葉も紹介された。

お話の後は沈黙のうちにテゼの曲を聞きながら自分を見つめる時間を持ち、最後に「素晴らしい仕事をされる皆さん、共に頑張りましょう!」と結ばれた。

奉仕者の任命式は十一月に行われる予定。

*幟町教会「Family Day(家族大会)」

九月三十日(日)、幟町教会で「家族大会」が行われました。また、この機会をインターナショナルデーとし、多国籍の方とともにミサを捧げました。ミサの中で江戸時代初期に長崎で殉教したフィリピン初の聖人、最初に来日したフィリピン人、聖ロレンソ・ルイス(九月二十八日霊名祝日)のスライドを見て、その生き方、信仰を学びました。ミサ後、お互いの理解を深めるために、それぞれの国の紹介や活動の紹介、持ち寄りの多国籍料理を楽しみました。食事の後は、「作って交流」が行われ、フィリピンのスイーツ作り、ベトナムの昔遊び、折り紙、ロザリオ作り、ワンポイント手話、星型ランタン作りなど好きな所に参加して親交を深めました。

(幟町教会 廣野豊満)



星型ランタン作り

海峡からの風 50 下関労働教育センターだより

「あなたはわたしを誰だと思うのか」。イエスがペトロに尋ねる。それは、私たちキリスト者一人一人への問いである。

『福音がわたしに尋ねた』という祈りの手引書を韓国で仕入れて祈りの材料にしている。九月十三日より開催された、韓国の東海岸を光州から北上する脱核巡礼中も、わたしはその問いについて思いめぐらしていた。

七年前に下関で始まった、韓国の脱原発運動との連帯セミナーが発展し、現在は毎年、日韓を交互に巡っていく脱核巡礼となった。広島教区からもシスター、青年が参加してくれた。『今こそ原発の廃止を』を韓国語へと訳してくれたシスター・ベルナデッタがバスでの隣席となり、話が弾んだ。話題は、「人間になる」ということだった。それを彼女は、フランス語の「アンフィッスモン(enfouissement)」という言葉で表現した。「もぐりこむ」といった感じの意味だという。決して目立とうとしたり、何かをやってやろうとするのではなく、人々の現実の中へと、謙遜にわけいっていく、という感じ

だろうか。韓国で人々に尊敬されたアメリカ生まれのイエズス会宣教師故ジョン・デイリー神父は、「神父」と呼ばれるのを好まず「アボジ(お父ちゃん)」と人々に呼ばれた。彼は、人生の夢は何ですか、と問われ、「人間になること」と答えた。脳卒中を起こし、晩年は十年近く、言葉も話せず、車いすとベッドの生活を余儀なくされた。「確かに彼の夢は実現したのです」と信者さんが言っていた。

人間の弱さを身に負っていくこと。私たちの人生の目標がそういうのだとしたら、やはり、この不完全な人間が完全に安全だと錯覚しながら原発を持つことは矛盾であり、大いなる思い上がりなのだと思う。原発建設を阻止し続けた祝島の人は、いのちを大切に、原発の危険性を感知することは人間のまっとうな感覚なのだとおっしゃっていた。まっとうな人間性を失っていく社会。

そのようなことを思いながら、東海岸を北上し続け、原子力研究所のある大田(テジョン)では、研究用原子炉と、そこに移動された核廃棄物による放射線の危険性と、人々に知らされてこなかった問題を、その立地区域から半径三十キロメートルの人々に知らせ連帯を呼びかける活動している、一人の年若いお母さんの話を聞いた。専門家ではない一般の主婦が、夫にも内緒で、独学し、その知識を人々と共有しようと、身を粉にして活動する。小学生の娘が「お母さん、しんどかったらそこれまでやらなくていいよ。私が大きくなったらするから」と言ったという。この子たちにそんな重荷を負わせたくない。その思いが彼女の背中を押すのだという。子を思うお母さんの心。次の世代にこんな負の遺産を残してはならない、という心。その母親の心の中に「もぐりこんだ」イエスに出会った気がした。

そう言えば、韓国のあるシスターが、「フランススコ教皇の心はお母さんの心だと思う」と言っていたのを思い出した「私のことを誰だと思うのか」。私にとつて、あるときから、イエスは生身の傷つきやすい人間であり続けている。しかし、この旅をへた今、さらにこう答えた。「主よ、あなたは、子どもの匂いのするお母さんの心を持つ、どこまでも人間らしい人です。」

(中井 淳 神父)

***教会学校リーダー会のお知らせ**

十一月二十五日(日) 幟町教会で、広島地区教会学校リーダー会研修会が開催される。講師は白浜満司教、「クリスマスについて」の講話や「広島教区要理教育の新方針」について、質疑応答などが行われる予定。

山口島根地区

***パイプオルガン わくわく体験パイプを作ってみよう!**

八月十二日(日) 宇部教会で、オルガニスト協会西日本支部と山口島根地区センターの共催によるパイプ作りが行われた。前半、宇部教会のオルガンを紹介し、演奏を聴いた後、小学一年生から中学生二十六名、大人三名が参加し、二時間かけて作成。講師にオルガンビルダーの中井郁夫氏の指導の下、A4一枚の紙から本物のパイプのような作品が見事に完成した。大学でオルガン科の生徒が授業で行う難しい工程を体験、全員音が鳴る素晴らしい出来上がり。音が鳴った時の皆さんの笑顔は最高だった。

岡山鳥取地区

***岡山教会青年会、五島・長崎、初めての訪問**

八月三日〜五日、岡山教会青年会は、上五島及び長崎市の教会を訪れました。上五島では白浜司教様のご実家である「アンデレの家」に宿泊をさせていただきました。上五島には集落ごとに二十九もの歴史ある教会があり、それぞれ教会で様々なステンドグラスやマリア像が見られ、とても興味深く巡ることができました。特に、世界遺産に登録された頭ヶ島教会(上五島)では、長崎教区の青年会の方々と交流することができました。当時の信徒が石を積んで造り上げたとのことで、信仰心の強さと歴史の重みを感じさせられました。長崎では大浦天主堂の歴史と数々の殉教者について学ぶことができました。(岡山教会樋口悠里)



地元の青年と頭ヶ島教会で

伯雲協働体

***名前を覚え、顔が思い浮かぶ共同体に**

少子高齢化が進む地方の

教会で最大の悩みは働き手が少ないことです。孤立化が進み、信徒は年とともに通院や毎日の生活に多くの時間がとられ、車がないとミサに与かることさえ難しくなります。ところで、フィリピン出身者が日本人と結婚し、子育てと老親の介護をして家庭を支えつつ、自らのカトリック信仰を守り続けて三十年余りが過ぎました。今では教会維持費・掃除当番・典礼等を分担し、当然のように主日の日本語ミサに親子で参加しています。

また、最近、家族揃って主日ミサに参加するブラジル出身者が多くなりました。行政や各種団体の支援もあって、五年以上住み続ける定住者が増える見込みです。

主にこれら三つのグループ、日本人・フィリピン人・ブラジル人と、更には他国の出身者が一つの信仰でつながるために、お互いの名前を覚え、顔が思い浮かぶようになると、皆が名札をつけ、名前を呼びあうようになります。勿論、これは最初のステップにすぎません。しかし皆の思いを大切にしながら着実に進めていくべき方向性・歩みであると、思います。

(出雲教会河上隆一)

広島教区一粒会

朴根培 神学生



神学生の使徒ヨハネ朴根培と申します。私は韓国のテグ市で二男四女の末っ子として生まれました。大学でフランス語と韓国語文学を、大学院では現代哲学を専攻しました。現在、ソウルカトリック大学で典礼学を専攻しています。今年十二月に大学での神学の勉強を終えて広島教区に帰る予定です。

私が広島教区に初めて来た時は二〇一四年でした。そして二〇一五年に広島教区の神学生になり、今年で四年目、ソウルカトリック大学で神学を勉強しています。所属教会は観音町教会です。

私は司教様と神父様方、そして信者の方々に深く感謝申し上げます。私が安心して神学を勉強できるようにし、足りない私にたくさんのお愛を示してください。このような愛のおかげで私は広島で幸せに生活することができました。

私に示してください。その大きな愛に報いるために私ができることは、今後謙遜な人として生きることだと思えます。特に多くの信者の方々が私に言ってくださった「ぜひ広島教区の司祭になつて一緒に暮らしましょう」という招きは、もっと私を神学の勉強に邁進するようにしてください。また謙遜に生きていくために祈り続けるようにしてください。

このような感謝の気持ちを忘れず、今後謙遜に生きるために祈りながら努力します。

私の体はソウルの神学校で勉強していますが、私はよく祈りの中で司教様、神父様方、そして信者の方々に思い出しながら祈っています。そういうわけで、今はこんなに不十分な文章ですが、このように私の心を伝えます。今年十二月からは多くの方々に直接、私の心を伝えられるように努力します。

青少年 夏の行事 2018



「教区練成会」8月8日～11日

「主よ、わたしたちに祈りを教えてください」をテーマに、防府教会に約20人の子どもたちが集まった。子どもたちは、神父様や神学生と一緒に体験したお祈りについての講話や分かち合いなどを通して、「祈ること」の大切さを改めて感じていたようだ。また、主任司祭の朴神父様をはじめ、信徒の皆様の温かいおもてなしをいただき、お腹も心も満たされた。



「教区青年大会」8月13日～14日

毎年教区の青年が集う青年大会。今年はスポーツとレクリエーションを中心に親睦を深めた。スポーツセンターでバレーボールをし、幟町教会ではBBQをしながら交流会を楽しんだ。青年たちは、白浜司教様の「神様は、みこころを通してわたし達一人ひとりをイキイキと幸せになる心のふるさとへ導いてくださる。一人も滅びることはない。」という言葉とともに派遣された。



「教区大学生大会」8月19日～20日

18歳～22歳の青年を対象に開催された大学生大会は、同世代だからこ語り合える将来の話や高校時代の話に花が咲き、あっという間の二日間だった。これからも手と手を繋ぎあって支え合いながら進んでいきたいと思った。



「教会に人を呼びたい」

岡山教会 大西勇史神父

忘れられない言葉がある。昨年の神学生合宿でのこと。養成担当の神父様が神学生たちにこう言った。「みんなは宣教についてどう考えている。俺たちの世代は宣教については正直あまりうまくいかなかったと思っている。なにか具体的なアイディアがあるか。」

合宿最終日の食後のまったりした時間だったので、えー、今かよーと思った。いきなり抜き打ちのテストを宣告された学生の気持ちを思い出してほしい。

あつという間に自分の順番が回ってきたので苦しまぎれに、「もし出来るならコーヒーションとか、人の集まりそうなイベントやコンテンツを提供出来たら」とか何とか雲を掴むような具体性に欠けたことを言った。幸いに次の神学生が、「病者訪問や

冠婚葬祭は未信者の方との接点になる。そこに力を入れてやっていきたい。」と、まともなことを言ったので私もそうだ、その通りだ。その現場こそ宣教の大チャンスだ。と心の中で激しく同意していた。

しかしそれを聞いた神父様は一言、こう言った。「それなら俺たちもやってきた。そういう事じゃない、+αがないとダメなんだ。」雷に撃たれたくらいびっくりした。自分は宣教ということに関しては意識の高い方だと思っていた。しかし、このやり取りによって自分の見えていた宣教という世界がいかに狭かったかを痛感した。従来のも

の以外にその糸口を見つけるようでなければ意味がない。そう理解した瞬間だった。これは啓示であり、とても大きなバトンを渡されたと感じた。その証拠にその晩は、わけもわからず興奮して一睡も出来なかった。

それから一年以上、司祭として歩み始めてから半年が過ぎようとしている。+αどころか主任司祭や信徒の皆さまに手を引いてもらわなければ歩けないほどのよちよち歩きのくせに、もう片方の手に握った大きなバトンを決して放そうとしないわがままな私をお許しください。教会に人を呼びたいんです。



「NWM in 京都」9月22日～23日

ネットワークミーティング(NWM)は、青年が全国各地から集い、交流する場として年2回開催されている。第35回NWMは、京都府宮津市で行われた。「むすんでひらいて」のテーマのもと、班のみんなに自分のことを教え、みんなのことを知った。また、神様と自分の「結び」についても深めることで、「ひらいて」を感じることができた。神様から遣わされた私たちは様々なものとむすばれている。そこには神様の意図があり、何か意味があるはずだ。このことをどのように伝えていきたいのかを一人ひとり考える機会となった。



教皇フランシスコが訪日の時期について初めて言及した。実現すれば三十八年ぶり。日本中の信徒にとって大きな喜びの日となるだろう。(あ)



(98)